

インフォーマルな贈与と顔の見える関係性 ——「おすそわけ」と「差し入れ」の比較調査から——

社会学部現代社会学科 1922074

指導教員 川瀬 由高

氏名 沼崎 杏香

要旨

「おすそわけ」がいつの間にか私の日常生活の一部になっていたが、これが地味に「わずらわしい」と思うのはなぜなのか。そもそも「おすそわけ」を何のためにやっているのか正直分からない。これらの素朴な疑問が本研究の問題意識である。

本研究の目的は、「おすそわけ」が私や家族にもたらしている社会的な役割が何であるのかを解き明かすとともに、公的な記録に残りにくい「おすそわけ」や「差し入れ」をフィールドワークに基づき、記録し、後世に「記録資料」として残すことにある。

序論では、本研究の背景や、目的、用いた研究方法の詳細について述べている。

第一章では、「おすそわけ」という語の一般的な定義や使われ方をこれまでの経験や下調べから得られた前情報として紹介した上で、実際の日常生活において現代マナーに関わるものであること、文化人類学の先行研究では「おすそわけ」の研究が乏しい人類学の先行研究を検討した。

第二章では、「負い目の感情」が根底にあるが故に良くも悪くも社会関係を維持し、また新たに生み出す特性がある「贈与交換」の理論の特徴を確認した。特に小田亮とベフ・ハルミの分類法に注目し、多様な形態をとる「贈与交換」のなかで、「おすそわけ」はどのように位置づけられるのかを論じた。

第三章では、フィールドワークを通して得られた「おすそわけ」の具体的な事例を紹介した。「おすそわけ」が単なるモノとモノのやりとりではないことや、「おすそわけ」のわずらわしさと扱いきれなさを、それぞれの文脈に即して記述することで明らかにした。

第四章では、比較対象となる同人即売会で行われる「差し入れ」の具体的な事例を紹介しつつ、前章の「おすそわけ」の事例との類似点と相違点を考察し述べている。

結論では、「おすそわけ」と「差し入れ」の違いを、レヴィ＝ストロースの真正性の概念を基にした「顔の見える関係」か「顔の見えない関係」かという観点から整理できることを指摘した。その上で、「おすそわけ」が「単に良いもの」ではないということや、最後の疑問として、金銭を渡すことは「おすそわけ」のタブーなのかについて述べている。

「おすそわけ」と「差し入れ」という私の身近な世界(日常生活の世界と趣味の世界)で行われているインフォーマルな贈与を比較したところ、一見同じ行為のように見えた「おすそわけ」と「差し入れ」はその関係の質が「顔の見える関係」と「顔の見えない関係」であることが明らかとなった。「おすそわけ」が地味にわずらわしかったのは、「顔の見える関係」であるからこそだったのである。